

求菩提の鬼の神通力

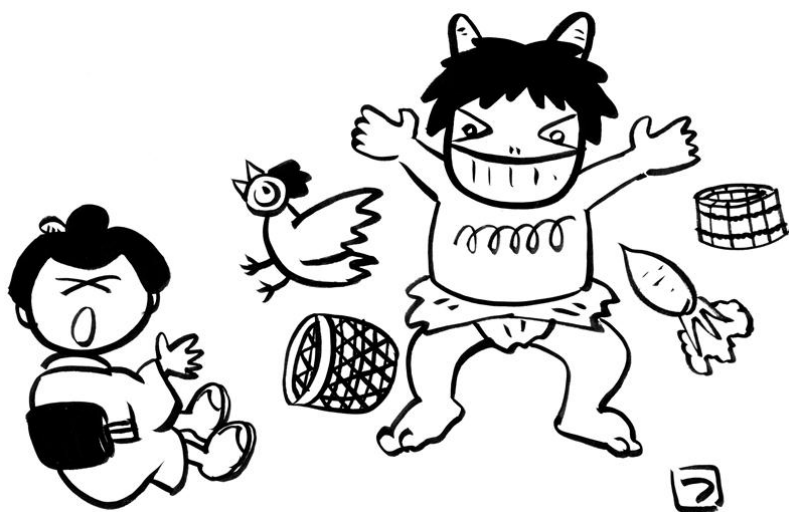
「求菩提の鬼の石段」という話を知っちよるかのう。あれとようにた話が他にもあつてな。どれ、一つ聞かせてやろうか。

昔、求菩提の山に鬼が住んでおつた。この鬼は大変な乱暴者で、里に下りてきては、作物をあらしたり、牛や馬をぬすんだりといった悪さばかりする。村人たちは困りはてておつたが、なにしろ相手は鬼じや。力が強いだけでなく、神通力（なんでもできる不思議な力）まで持つておる。とてもかなうものではないと、ただ、ただ、おびえておつたそつな。

そんなことが続いたので、村にはだんだん食べ物が少のうなつてきた。ある日のこと、鬼が、

「ああ、腹が減つてしょうがない。明日は、人間を食つてやるかな。」
と言い出した。これには村人たちもたまがつてしもつた。このままで

はおおごとになる。何とかしなければと、より集まつて考えに考えたあげく、一つの知恵がうかんだ。そうとなれば善は急げとばかり、さつそく村人の代表が鬼に手紙を書き、村はずれのクスの木にはりつけたんじや。そん手紙にはこう書いてあつた。



「あなた様の力がすさまじいのはよう知っておりますが、ひと晩で岩岳川にふち（川の水をせき止めてつくった水たまり）を造ることは無理でしょう。もし、できたなら、あなたの望み通りにいたします。できないときは、求菩提から出ていつていただきたい。」

鬼の神通力がいかにすごいといっても、ひと晩でふちなど造れるはずもない、というのが村人たちの考えじゃった。だが、鬼は手紙の申し出を承知したようじゃった。

そん日の夜ふけ、鬼の仕事ぶりをのぞきに行った村人が、ころがるようにしてもどって来た。鬼が、あらかたふちを造り上げておるといふのだ。神通力というのは、何とすごいもんじゃるか。大あわてで村人たちはまた相談を始めたが、どうしてよいやら、困りはててしもうた。

そこへ、求菩提の権現様が現れた。村人たちの話を聞いた権現様は、

「わたしにまかせておきなさい。」

と言うなり、かぶっていた竹編みの笠をぬいで、バサツ、バサツとにわたりの羽ばたきの音をまね、

「コケコツコーツ」

と声をあげた。それを聞いた鬼は、一番どりの鳴き声だと思いいこみ、

「しまった、夜が明けた。」

と、大あわてで村を走りぬけにげようとした。けれどあんまりあわ



てたので、村はずれのクスの木に、激しく顔を打ちつけて死んでしまった。

このことがあって、村人たちは地名を「鬼木」としたそう。

豊前市鬼木には、今も古いクスの木があつてな。その木の幹にはコブがあり、よう見ると鬼の顔のように見える。こん時鬼がぶつかった木だと、村の人たちは今も言い伝えておるそう。

この鬼にまつわる話は、まだまだあつてな。

豊前市岩屋の法覚寺の裏には、「なみだ石」という石がある。ふちを造りそこねた鬼がくやしさをあまりこの石の上になみだをこぼし、穴がほげてしまったものだと言われている。

また、豊前市明神の厳島神社には、鬼の手と足をまつたほこらがあつてな。今でも、「百手祭り」という祭りが行われておる。

それから、今は埋め立てられて陸続きになつてしまつたが、椎田には、「鬼塚」と呼ばれる鬼の首をまつたこんもりした丘があつてな。ここがまだ島だつたころ、

不思議なことに、どんな高波が打ち寄せても、決して島が海にせずむことはなかつたということじゃ。やはり、鬼の首をまつているだけあつて、首から下はずんでも、海の神様にもにらみをきかせ、頭はずませなかつたのかのう。

いやはや、まつたく、鬼の神通力とはすごいもんじゃなあ。



鬼木のクスの木